東京大学大学院　都市工学専攻
2022 年度　修士論文梗概集

宮城俊作　教授
中島直人　准教授
指導教員　永野正義　助教

伊香保温泉石段街の空間構造の変容
大屋層の解体過程としての近代
THE CHANGE OF SPACE STRUCTURE OF IKAHO SPA TOWN
FOCUSING ON THE RULING CLASS IN MODERN TIMES

37-216180　合田智揮

In this paper, I reveal the transformation of space in Ikaho spa town in modern times. This hot spring town had prospered since the warring states period. This town has the strong governing mechanism that the Oya ruled Kadoya in every aspect of life. In this paper, I focus on the dismantling process of Oya and the changes related to the social and the rights to the hot springs since Meiji period.

1.研究の背景と目的

日本には数多くの温泉地が存在する。温泉地は長い歴史を持つが故に、その空間は優れた計画者の存在ではなく、利用との対話を繰り返す中で長い時間をかけてアノニマスに形造られた空間であるが、それらは昨今テクノロジーや社会の急激な変化により失われつつある。現在の温泉地空間の魅力の消失の原因には、この空間構成の不明瞭化が一因としてあり、かつて存在した空間構成の再認識・またその変遷の過程を追うことが重要である。

伊香保温泉は計画的に温泉街が計画され、大屋による旅館営業・土地と湯の所有を通じて実質的な町の支配・経営が行われてきた稀有な都市である。その空間構造はこの社会構造と不可分であり、その過程は研究の余地がある。

本稿では、伊香保温泉の空間が変質したメカニズム、すなわちかつて存在した社会構造と空間構造の連関の変化と現在の残存状況を明らかにすることを目的に、有力湯宿の湯権・土地所有・立地状況の変遷を追う。

2.対象地の概要

群馬県渋川市に位置する伊香保温泉石段街の始まりは、戦国時代末期に長篠の戦に敗れた武田勝頼が負傷した兵士を休ませるために大名の家臣団と地元の名士を中心に湯治場を作らせたことだと言われている。この 7 名の郷士は 14 名に分裂し、後に大屋十四軒と呼ばれ、伊香保の支配層として定着した。彼らは広大な土地所有・湯の所有・屋敷/旅館の営業を行い、石段街奥に建物を構えていた。政治的な支配権も同時に掌握し、関所の門番も交代で務めるなど行政的な立場も兼ねていた。湯の所有は十二大屋に限られるなど大屋内での格差も存在した。一方、「門屋」は大屋に隷属して生活する者を指し、大屋敷地内に住居を与えられ、旅館での使役や地代・租税を納めた。近世を通じてこの支配構造は維持されるも、近世後期には商いによって富を蓄える門屋も現れた。

これらより、伊香保温泉を他の温泉街と比較した際の空間的特徴として、「内湯型」で「繁華街路型」の温泉街であることがあげられる。源泉から石段街へと湯を引く計画的な作業により、他の多くの温泉街と異なり外湯を持たず、内湯を有する旅館が石段街を囲む形状をとっている。これにより、内湯を有する旅館が伊香保の都市構造の核を担っていると考えられる。

タイプ		重点調査対象地の外湯		その他温泉地
		温泉地名	外湯名称	
内湯型		伊香保		
外湯型	中心型	草津	滝の湯、松の湯、綿の湯、脚気の湯、熱の湯、千代の湯、富の湯、鷲の湯、煮川の湯、地蔵の湯、玉の湯、瑠璃の湯、御座の湯、凪の湯、関の湯	山中、道後、有馬、飯坂、武雄、鹿教湯、日奈久
	散在型	城崎	一之湯、御所之湯、鴻の湯、曼荼羅湯、柳湯、地蔵湯	野沢、渋、蔵王、紀伊白浜、修善寺、小浜、四万、那須湯本、雲仙
折衷型		熱海	大湯、小沢湯、河原湯、野中湯、清左衛門湯	箱根湯本、別府、熱海、玉造、湯河原、下呂、三朝、浅間、山代

表 1　内湯と外湯からみた温泉街の区分

タイプ	源泉地	名称	有力湯宿名	その他温泉地
広場型	草津	大屋	湯本三家、宮崎文右衛門、坂上治右衛門、坂上武右衛門、中沢善兵衛、黒岩忠右衛門、新井弥左衛門、高原長九郎、	山中、飯坂、道後、山代、修善寺、有馬
繁華街路型	熱海	湯戸	今井、渡辺、相模屋、富士屋、江戸屋、巴屋、鈴木屋、蔦屋、山口屋、藤屋、伊勢屋、伊豆屋、駿河屋、坂口屋、相田屋、蓬莱屋、中宿屋、小富士屋、三浦屋、遠州屋、真砂屋、尾張屋、武蔵屋、梁屋	野沢、四万、日奈久、浅間、那須湯本、赤城湯、温海、銀山、蔵王、渋、箱根湯本、紀伊白浜、
	城崎		亀屋、水口屋、瀬戸屋、湊屋、糀屋、角屋、油屋、山城屋、丹後屋、長崎屋や、播磨や、[illegible]路屋、坂屋、大津屋、油筒屋宮前、井筒屋	
	伊香保	大屋	木暮金太夫、木暮八座衛門、木暮武太夫、岸六左衛門、岸権左衛門、岸又左衛門、島田平左衛門、島田治左衛門、島田程右衛門、千明三右衛門、大島甚左衛門、永井喜右衛門、後閑弥右衛門、福田金左衛門	

表 2　有力湯宿の配置

3.門屋の独立-大屋解体の萌芽-

本章では明治期から大正大火前までを扱う。特に、門屋の独立・小間口権の移動の観点から、当時の大屋が大きく減少した過程を明らかにする。

3-1.明治期の大屋層の土地所有状況

明治 18 年の等級帳から、大屋として 17 名の存在が記載されていること、小野義真氏と茂木惣兵衛氏の 2 名のみが既存の大屋階層ではなく外部から先進的に伊香保に進出してきた層であることがわかる。

木暮金太夫	一金壱三円也
木暮八郎	一金壱弐円也
木暮篤太郎	一金壱弐円也
島田平八郎	一金壱円也
大嶋甚左衛門	一金六円也
岸権三郎	一金六円也
岸六左衛門	一金六円也
千明三郎	一金八円也
永井喜八郎	一金七円也
嶋田治郎三郎	一金四円五拾銭也
後閑八十松	一金三円五拾銭也
島田多朔	一金四円也
紅葉館	一金四円也
小野義真	一金弐円也
岸又太郎	一金三円也
福田金七郎	一金三円五拾銭也
茂木惣兵衛	一金弐円也

表 3 明治 18 年 2 月時点での大屋階層の国税高

また、明治 30-44 年で、旧十四大屋は 4 軒まで減少し、一方で 6 軒の新大家が台頭していたことがわかる。

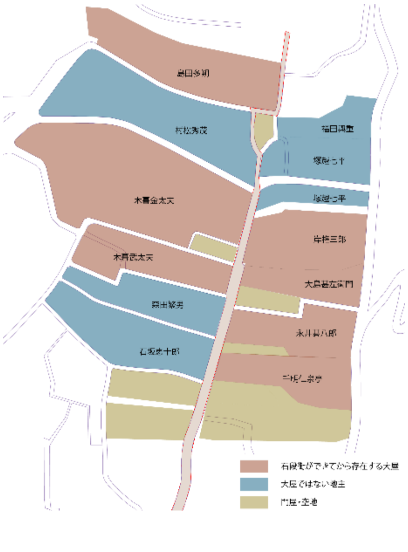


図 1 明治 30 年時点での大屋層の土地所有状況

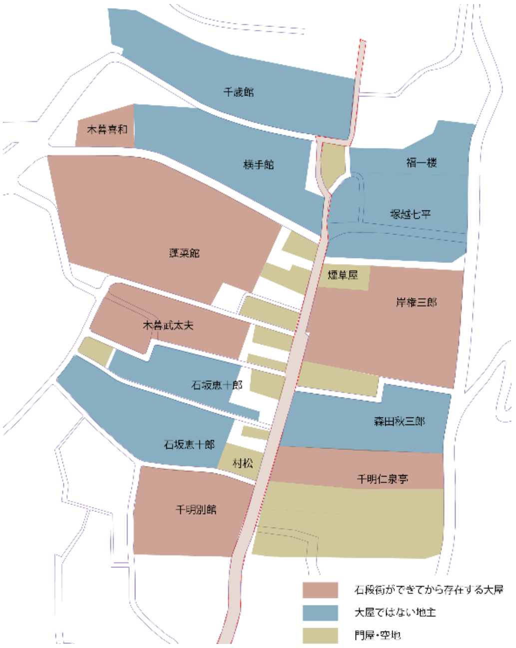


図 2　明治 44 年時点での大屋層の土地所有状況

また、明治末期には、門屋の土地を所有していた大屋は横手館、塚越旅館、岸権旅館、千明仁泉亭の 4 軒であり、千歳館、金太夫、武太夫、石坂旅館、福一、森秋旅館の 6 軒は門屋の土地を所有していなかった。（余ったら図を入れる）

3-2.小間口権の所有の変遷

明治期の大屋層の解体パターンには 2 パターンあると考えられる。1 点目が、土地と湯権が同時に売却される場合で、この場合は新たな所有主は新大家として機能していたと考えられる。明治 16 年の売渡証には、以下のように記載されている。

地所並二温泉売渡証

西群馬郡伊香保字湯香

一. 宅　地　　　弐拾六歩　　　地券状壱枚

一. 畑　地　　　弐畝廿七歩　　　同　三枚

一. 温泉滝　　　一本

　　但　我等所有ノ小間ロヲ過来テ湯溜箱ヨリ

五分ノ一ヲ分流スルコトヲ云事

右者今般都合ニ寄宅地及温泉相済代金三百五拾

円ニテ売渡候処実正也. 然上ハ右地所並温泉ニ付外ヨリ苦情等一切申立候様無御座候. 右ニ付保証人連盟此証御渡シ候上ハ後日決テ異乱無御座候仍テ如件

　上野国西群馬郡伊香保村

明治16年10月26日　売　主　岸　　六郎　印

保証人　木暮金太夫　印

　　　　岸　権三郎　印

　　　　島田　多朔　印

東京府北豊島郡地方　小野義真　　印

一方で、土地と湯権が別々に売却されている場合は、大屋は後継ぎがないまま没落し、同土地は小さく分割されていったとみられる。後閑八十松氏が明治 17 年に湯権を売却し、その後 19 年に湯を借用している証書があり、旅館営業の存続のために湯を切り売りしていたとみられる。
　大屋の湯量持ち分は明治期を通じて大きく変動するも、大正期には大屋が大半を所有していた。

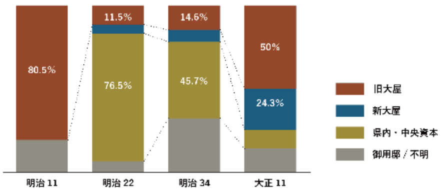


表 4 明治期の湯権の所有割合の変遷

　このように、明治期には 2 度の大火を契機とした大屋の没落が進み、14 軒から 4 軒へと減少した。大家の解体時は多くの外部資本の参入があり土地の流動性が高い中、大屋層の交代も起こったと考えられる。

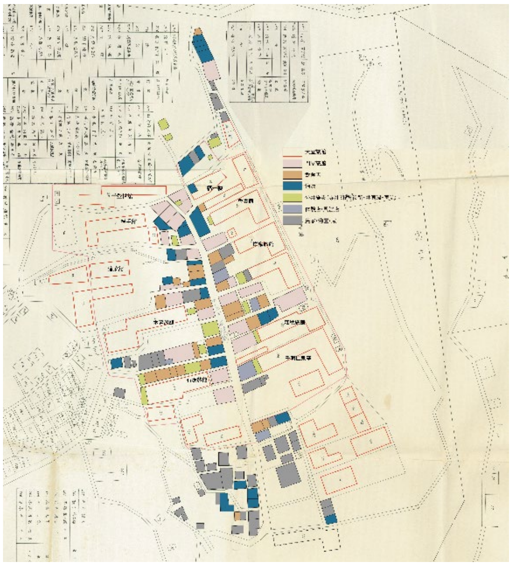
4.大屋の移転-近世来の制度の死文化と核の希薄化-

4 章では近代制度が確立する時期に着目し、近世来の制度の解体と大屋の解体を関連づけながら石段街という空間的な核から大屋が移転した過程を明らかにする。

4-1.大正大火当時の大屋と門屋の状況

大屋層に関しては、明治末期と比較すると①石坂旅館が一部の土地を手放していること、千明仁泉亭が石段街下段部を獲得していることの 2 つの変化が見受けられる。門屋に関しては、この地図に 142 軒記載されており、旅館業以外にも多くの業態が存在していたことが分かる。

図 3 大正大火当時の石段街周辺の建物用途



1967 年の地図からは、①千歳館の買収(1952 年に警察共済組合が買収)②森秋旅館の移転(1920-30 年頃に郊外部に移転)③木暮旅館の移転(1947 年に郊外部に移転)④塚越旅館の移転(1967 年に郊外部に移転)の 4 つの大屋旅館の変化が見受けられる。

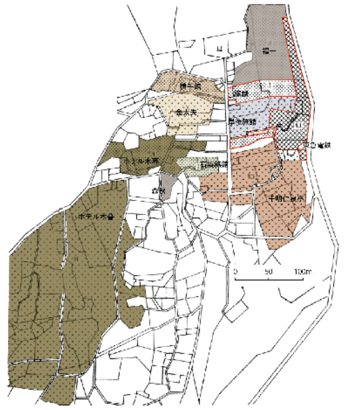


図 4
　1967 年時点での大屋による土地所有状況

4-2.大屋の移転と核の希薄化

4-1 での 3 軒の旅館の移転で共通していたのは、いずれも移転時に門屋を保有していなかったこと、湯の権利は移転後も保有し続けたことの 2 点であった。

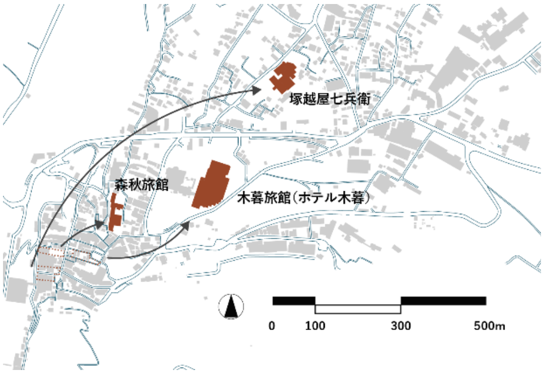


図 5 郊外部へ移転した旅館の配置図

これらから、大屋が既に門屋を失っていたという状況が、石段街からの移転を決断する一因だったと考えられる。すなわち、門屋部分の土地の保有が、石段街を見守るという社会的な役割も同時に担っていたと考えられる。

これら 3 軒の旅館の土地の活用状況に関しては、森秋旅館跡地には青山旅館が開業(現在は閉業)、木暮旅館跡地は小規模に分割され商店が立ち並び、塚越旅館跡地はその前後に位置した岸権旅館、福一、伊香保町が土地を分割して所有している。こうして、かつての大屋が立ち並んでいた景観はますます曖昧になっていった。

4-3.近世来の制度の変化

1946 年に旧門屋層の中小旅館業者が集い、「伊香保民主化同盟」を結成し、戦前の新旧大屋層による温泉および村政の独占的支配に反対し、その開放を迫った。1952 年時点で新旧大屋による分湯量は 65.8%とその比率は依然として高いものの、小間口権が売買や二次的利用が可能な近代的な法律上の権利として確立した。また、1952 年の町長選挙では、横内甲子吉という同盟側からの当選者を出し、助役・町会議員の大半を占めて町政を担当し、今日までこの体制は続いている。これらから、温泉町の支配機構の変容がうかがえる。

1970 年時点で、新旧大屋は、移転した 2 軒を除けば 10 軒から 8 軒へと減少した。

5.外部資本による経営交代-2 度目の観光地化の波-

本章では、高度経済成長期を経たバブル期～現在の温泉街を対象に、大屋層が解体した現在において大屋層の変遷を改めて分類し、それぞれの特徴を考察する。

5-1.高層化と経営交代

高度経済成長期には、金太夫、岸権旅館、福一、石坂旅館の 4 軒が高層化を果たし、木造 3~4 階建てから鉄骨鉄筋コンクリート造の 5~8 階の建物へと建て替わった。その後、石坂旅館は 1992-97 年前後に埼玉建工に、金太夫は伊藤園ホテルズに 2006 年に買収され、また岸権旅館は現在特別清算中である。いずれもバブル期の高層化が奏功せず、借金が尾を引いている形である。これに伴い、石坂旅館の湯権が中小旅館に売却されたが、これは町政の範囲に小間口権の保有者範囲が追い付いたとみることもできる。同時に、土地と湯権の分離は更に進行した。

5-2.現在の大屋と門屋の状況

1967 年時点と比較しても大屋の立地は大きな変化はない。平形眼科は現在は渋川市の眼科医院だが、かつてはこの地域の高利貸しで、1945 年にはこの地を所有していたことから、大島家から担保になっていた土地と湯権を入手したと考えられる。

図 6 現在の大屋と門屋の状況

6.まとめ

6-1.大屋の動態の整理

大屋層の解体・移転のプロセスを整理すると、判明している限りではいずれも、大屋が所有していた「旅館営業」「湯」「土地」「門屋」のうち、まず門屋を失い、次いで湯または土地を失い乃至放棄し、最後に旅館営業を売却するものであった。ここから、伊香保温泉における空間構造と社会構造をつなぎとめる主要な要素・媒介が、内湯だけでも旅館だけでもなく、門屋の存在得会ったことが推察される。

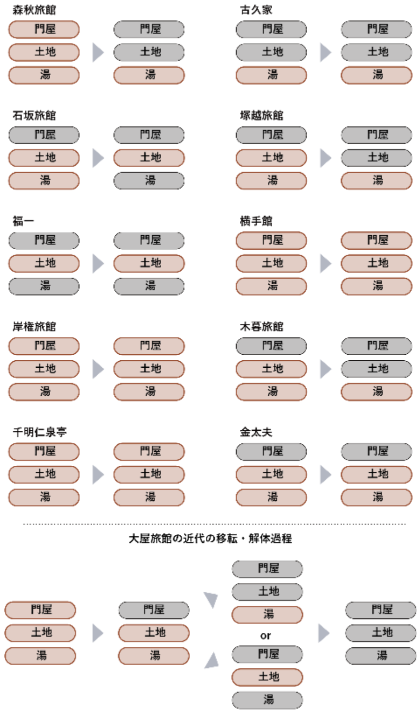


表 5 各旅館の門屋・土地・湯の所有状況の変遷

また、現在の大屋は以下の 4 つのパターンに分類される。全所有型は伊香保町において現在も大屋と呼ばれており、格式高い。千明仁泉亭と横手館は大正当時から変わらない木造 3~4 階建ての建物を維持している。土地所有型は明治期に門屋が独立して以降は変化なく、伊香保においてはいずれもバブル期以降に外部資本による買収済である。土地所有型大屋は湯を元から保有していない大屋と、途中で手放した大屋に大別される。近世まで土地と湯は不可分であったため、後者は外部資本である可能性が高い。前者は伊香保の十四大屋と十二大屋の差という特殊な社会状況が生んだイレギュラーなパターンといえる。湯所有型大屋は、かつて老舗、湯本の可能性が高く、伊香保においては湯を保有したまま外部に移転しているため、経営状況等の悪化ではなく、交通利便性の希求などポジティブな移転を行った可能性が高い。

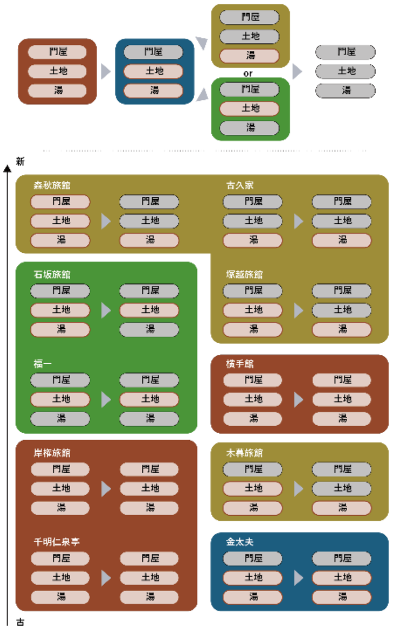


表 6　大屋旅館の分類

6－2.　結論

本研究の結論は以下の 4 点にまとめられる。1.大屋の解体、すなわち大屋を担保していた「門屋部分の土地の所有」「石段街横の土地の所有」「小間口健の所有」の 3 条件の解体は、門屋の独立→土地/湯の放棄という順番で起きた。2.明治期に入ると大屋の没落時には湯権のみを売却するようになり、近世来の小間口権と土地の不可分性を破るものであった。一方で、旅館営業・門屋・土地・湯が全て引き継がれた場合、家主は新大家として機能した。3.大屋が湯を保有しながら、石段街郊外部に移転する事象は、1 が先立つものであるが、石段街を中心ンい旅館が立ち並ぶ伊香保独自の空間構造の希薄化を引き起こした。4.1,3 より伊香保温泉における空間構造と社会構造をつなぎとめる主要な要素・媒介は内湯だけでも旅館だけでもなく、門屋の存在であった。

今後は当時の議論も含めた史料調査の発掘、また同類型の他の温泉街との比較を横並びで調査することによる検討が望まれる。

主要参考文献

1. 山村順次(1998)「日本の温泉地」
2. 内務省衛生局(1886)「日本鉱泉誌」国立国会図書館デジタルコレクション
3. 渋川伊香保温泉観光協会資料(2019)「旅館数統計表」
4. 下村彰男(1988),「近世・明治期における温泉地の空間構造に関する一考察」,「造園雑誌」,52(5)pp223-228
5. 下村彰男(1990),「明治期温泉地の空間構造と地形・水系との関係性に関する考察」,「造園雑誌」,54(5)pp215-220
6. 下村彰男(1992),「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」,「造園雑誌」,56(5)pp241-246
7. 山田桐子・宮崎均一(2008),「温泉街における地域特性からみたまちづくりに関する研究ー地理的条件ならびに形成過程からみた地域特性の傾向ー」,『日本建築学会計画形論文集』,73(626),pp819-826
8. 福嶋啓人(2015),「共同浴場を中心とした温泉町の空間変容過程について　近代加賀山中温泉を事例として」,「日本建築学会計画系論文集」,80(711),pp1223-1231
9. 松田法子・大場修(2005),「「湯株」の存在形態にみる温泉町の近代化と空間構造の変容」,『日本建築学会計画形論文集』,70(597),pp223-227
10. 中村駿介 (2021),「近世有馬温泉町の空間構造;有馬二十坊の社会的・空間的特徴について」,『日本建築学会計画形論文集』,86(780),pp657-664
11. 山村順次(1969),「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能」,「地理学評論」,42(5),pp295-313
12. 山村順次(1969),「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の意義　集落の社会経済構造からみた」,「地理学評論」,42(8),pp489-505
13. 村田敬一・初田亨(2000),「群馬県の木造3階建て温泉旅館建築」,『日本建築学会計画形論文集』,65(538),pp243-249
14. 松田法子・大場修(2004),「泉源開発と旅館街の立地傾向にみる近代大規模温泉町の成立過程：別府温泉を事例として」,『日本建築学会計画形論文集』,69(582),pp153-159
15. 伊香保町教育員会(1970)「伊香保誌」
16. 下村彰男(1992),「近代における温泉地空間構造の変遷に関する考察」,「造園雑誌」,56(5)pp241-246
17. 古久屋蔵版(江戸末期)『伊香保温泉名所一覧』
18. 千明仁泉亭所蔵文書(1969)「かきあつめ」
19. 国土地理院地図
20. 渋川市 HP 伊香保町基本台帳・渋川市基本台帳 https://www.city.shibukawa.lg.jp/shisei/toukei/jinkou/p002895.html (2022年12月22日閲覧)
21. 渋川伊香保温泉観光協会(2022)「伊香保温泉宿泊客統計表」
22. 渋川伊香保温泉観光協会資料(2019)「旅館数統計表」
23. 西川亮・中島直人・窪田亜矢・西村幸夫(2017)「1933 年都市計画法改正による観光町村への法定都市計画の敷衍の特異性；戦前の観光町村に対する法定都市計画に関する研究　その１」、『日本建築学会計画形論文集』,82(736),pp1475-1485
24. 西村幸夫(2011)「観光政策から見た都市計画」,『新都市』,Vol.65, No.2, ,pp98-101
25. 本多静六（1920)「伊香保の新経営策」
26. 千明仁泉亭所蔵文書 (発行年不詳)「大島氏眼目録」
27. 福一旅館（発行年不詳)「福一旅館　社史」
28. 関東測量株式会社調整『伊香保町圖』
29. 千明仁泉亭所蔵(1969)「伊香保絵図ふろく夜話」p33
30. 日本諸国温泉一覧（温泉番付表）
31. 明治 45 年上州伊香保温泉場全図(国際日本文化センターデータベース)
32. 群馬県立文書館(1883)「地所並二温泉売渡証(千明仁泉亭文書)」
33. 千明仁泉亭所蔵(1969)「大正9年伊香保絵図」
34. 木暮淳（2017)「金銀名湯　伊香保温泉」
35. 木暮金太夫(1992)「絵葉書と鳥瞰図で見る日本の温泉」p66-72